

令和2年3月18日

## 職員のみなさんへ

昨年6月に、2歳の女の子が亡くなるという大変痛ましい事案が発生してから、今月で9か月が経過しました。

この間、職員へのヒアリングなどを通じて、外部の専門家による検証が行われ、今月11日に、その報告書の手交を受けました。

みなさんにはまず、この報告書をぜひ読んでほしいと思います。

報告書の中にはすべての職場に関わる仕事の取組姿勢についても触れられています。そのうちのひとつは協働の視点です。

今回の事案では、他の部局が関わり始めたら自分たちの仕事から手が離れる、自分たちは手を引くという感覚や、支援が終了するときの他部局への情報共有、支援する人が引越した際の引継ぎの仕方といったことが課題として指摘されています。

協働するということは、関係する複数の部局が折り重なって仕事をするということです。それは、ある場面では効率的ではないように見えるかもしれませんが、しかし、協働には、互いに成長し合い、チーム力を高めていく効果もあるのです。これは、職員間に限らず、市民や企業との協働においても、同じことが言えます。

もうひとつは、支援が必要な方々の立場に立って考えるということです。

例えば、自分の家族に置き換えて考えてみてください。

今回の事案のお母さんは、妊娠当時、まだ10代後半でした。ここでは単に、妊婦に対する支援ということだけでなく、10代後半の子どもが妊娠出産した、その母と子へ

の支援が必要だと考えれば、また違う支援のあり方があったかもしれません。

また、支援を次に引き継ぐ時、支援を終了する時、その支援がぷつぷつと切れてしまうことのないよう、「その方の困りごとは続いている」ことを意識してください。

相手の立場に立って、「何に困っているのか。どんな支援が必要なのか。仮に自分たちが支援から外れるとしても、他にどんな支援につないであげたらよいか。」ということを考えてみてほしいのです。

この10年余りで4回目となった今回も、過去に指摘されたことが、繰り返されてしまっています。報告書の最後には、「札幌市は、これまでの死亡事例等から本気で学ぶつもりがあるのか。市民の困難を共感的に洞察し、協働の文化を持つ組織になる必要性を、本気で感じているのか。市政のあり方そのものが問われている。」との言葉が刻まれています。

私自身も含め、全職員がこの言葉を重く受け止める必要があります。

どうか、職員の皆さんも、職場の中でお互いの仕事を振り返りながら、私と一緒に学び、変わっていきましょう。

秋 元 克 広